

「面接練習なし」でどう？

「今年度は、面接練習をやらないうちというのではどうやね？」
昨年度、三年主任K教諭に、私はこう言いました。彼はこの提案に少々驚いたような顔をしました。実際、私の提案は却下され、学年の方で面接練習が行われました。

今年度も私の考えは同じです。「面接練習は必要ない」と考えています。受験の前に特訓して「付け焼刃」的に体裁を整えても本当の力ではありません。本来は、日常生活の中で身につけるべきものです。ただし、面接に向けて自分で準備して「こういう場合はどうしたらよいか」「どのように答えてよいか」と尋ねてくる者には、丁寧に指導したいと思っています。

今朝、三年生の朝の会を参観しました。室長の話や班会議、教師の話に立ち合いました。そのとき思ったのは、今の状態が続けば、「面接練習なし」は実現しないなあということでした。

朝の会はスムーズ流れているように思いましたが、要所要所に心配な姿がありました。話す者が仲間の方を見て語れない。話す者がそうだからなのか、聞く者も話す者から目を切っている。頬杖をつけて聞いている。完全な「気を付け」ができない。「はい」や「ありがとうございます」などの反応の声が出せない者がいる。こういう姿が心配になりました。

これらのことは、大人が生きる社会の中では、あってはならないことです。目上の方と話す時に、その方に視線が向けられなかったり、返事や礼がはつきりと言えなかったりすれば、社会人としての常識が疑われても仕方ありません。名前を呼ばれても返事ができなければ、「無礼だ」と思われて当然です。

私も何度か面接の試験官をやりましたが、やはり、面接を受ける方と正対した時の様子が最も気になります。その中でも、視線はとて大切です。こちらが真剣に尋ねているのに、応える側の視線がそれたり定まらなかつたりしたときに、生まれるのは不信感だけです。どんなに素晴らしい内容を答えても、聞き手には入っていきません。

受験はあくまでも通過点。義務教育を終える時には、受験という狭い枠ではなく、「大人の仲間入り」という広い枠の中に身を投じて考えてください。

感動的に話せなくてもよいのです。失礼のないように、誠意や情熱が伝わるように話せばよいのです。食い入るように聞かなくてもよいのです。相手に不快感や疑念を抱かせないような聞き方ができればよいのです。変に力んで返事やあいさつを返さなくてもよいのです。相手が気もちよくなるようなさわやかな返事や礼ができればよいのです。

こんなふうになれたら、面接なんて恐れるに足らないものになるはずですよ！今年度こそ「面接練習なし」ではどうか。私はぜひそうして欲しいけどね。

(六月三十日 記)